

オンラインシンポジウム

第5回 「未来志向の日本語教育」

2022年8月4日（木）

13:45~17:40（日本時間）



主催 筑波大学 CEGLOC 日本語教育部門

共催 筑波大学 CEGLOC 日本語・日本事情遠隔教育拠点

大阪大学 CJLC 日本語・日本文化教育研修共同利用拠点事業

科研費基盤研究（B）「CEFRの文脈化と日本語・日本語教育研究への応用」（代表:小野正樹）

JSPS 研究拠点形成事業 アジア・アフリカ学術基盤形成型「社会的要請に対応可能な日本語教師養成の拠点形成」（代表:小野正樹）

趣旨

シンポジウム「未来志向の日本語教育」が2019年2月16日にスタートし、2022年8月4日が第5回の開催となります。本シンポジウムは21世紀の刻々と変化する状況の中で日本語教育をどのように構想することができるのかを大きなテーマとし、幅広い分野の研究者に発表および意見交換の場を提供します。発表者には筑波大学 CEGLOC 日本語教育部門が発行する『日本語教育論集』第38号に発表内容をまとめた原稿の投稿申込が可能です。[詳細](#)についてはご確認ください。

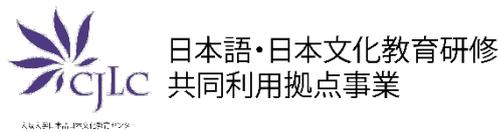
参加登録とアクセス

本シンポジウムはオンライン（Zoom）で開催され、参加は無料ですが、2022年7月27日（水）（23:55日本時間）までに参加登録をしてください。2022年8月1日（月）までにミーティングのアクセスリンクを送信します。



[参加登録フォーム](#)

共催者ロゴ



シンポジウム実行委員会 Vanbaelen Ruth、文 昶允

問い合わせ先 base.nihongo@gmail.com

プログラム概要

13:45~	開場: Zoom にアクセス 参加登録のうえ、2022年8月2日までにミーティングのアクセスリンクが届かない場合は、 < base_nihongo@un.tsukuba.ac.jp >にご連絡ください。	
14:00~ 14:10	開会にあたり: Vanbaelen Ruth (筑波大学 准教授) 来賓のあいさつ: 加藤均 (大阪大学 日本語日本文化教育センター長) 当日運営: 筑波大学大学院 D1 大竹春菜・友宗朋美・Ratrimoharilala Elisoa Andry	
	口頭発表は2つのブレイクアウトルームで行われます。ご自由に移動してください。 3つのラウンジを設けています。議論を続けたい方や、雑談したい方、ご自由にお使いください。 必ず Zoom の最新バージョン(5.11.1(6602)以上)をインストールのうえ、ご参加ください。	
	ブレイクアウトルーム①	ブレイクアウトルーム②
14:15~ 14:45	発表 1: 岩井茂樹、小森万里、立川真紀絵、松浦幸祐 短期交換留学プログラムにおける産学民連携型セミナー開催の意義と課題	発表 2: 関口美緒 作文クラスにおける段落作成の誘導—フローチャートを用いて—
14:45~ 15:15	発表 3: 二ノ宮崇司、Umarova Munojot、小野正樹 ウズベク人日本語学習者による禁止の注意	発表 4: 黒田史彦、伊作太一、木下直子、田中久実、伴野崇生、鍋島有希 外国人材との協働コミュニティをつくるためのパターン・ランゲージの全体像とその作成過程
15:15~ 15:45	発表 5: 小野正樹、Antoine Abi Aad 中上級学習者向け日本語教育教材「日本語マグネット」のビジュアルデザインの必要性和有効性	発表 6: 松岡里奈 日本文化学授業の同期型遠隔配信におけるチャット欄活用の一提案 —授業者以外の教員によるくやさしい日本語>による授業解説—
15:45~ 16:00	休憩	
16:00~ 16:30	発表 7: 笹川史絵、下村朱有美 日本語ティーチングアシスタントのオンライン実践における困難点とその要因 ~ティーチングアシスタントの語りをもとにした海外日本語教育機関における事例研究~	発表 8: 陳祥 オンライン授業における“manaba”活用の試み —相互閲覧機能と掲示板によるスタディ・ログを中心に—
16:30~ 17:00	発表 9: 加藤均、藤平愛美 ポストコロナ時代を見据えた日本語・日本文化教育の多角化戦略	発表 10: 大竹春菜 タイ人高校生の日本語学習意欲に影響を与える要因 —テキストマイニングによる自由記述の予備的分析—
17:00~ 17:10	総括: 伊藤秀明 (筑波大学・准教授、日本語・日本事情遠隔教育拠点長)	
17:10~ 17:40	オンライン懇談会	

プログラムの詳細は次ページに記載

プログラムの詳細

<p>14:00~ 14:10</p>	<p>開会にあたり: Vanbaelen Ruth (筑波大学 准教授)</p> <p>来賓のあいさつ: 加藤均 (大阪大学 日本語日本文化教育センター長)</p> <p style="text-align: center;">当日運営: 筑波大学大学院 D1 大竹春菜・友宗朋美・Ratrimoharilala Elisoa Andry</p>
<p>14:15~ 14:45</p>	<p>発表 1: 岩井茂樹 (大阪大学日本語日本文化教育センター・教授)、小森万里 (所属同・准教授)、立川真紀絵 (所属同・講師)、松浦幸祐 (所属同・特任助教<常勤>)</p> <p>短期交換留学プログラムにおける産学民連携型セミナー開催の意義と課題</p> <p>大阪大学短期交換留学プログラムの一つであるメイプル・プログラムでは、コロナ禍で渡日できていない留学生が地域住民から、生の情報、すなわち、地域に密着した情報を得ることにより、留学先である箕面について理解を深めることを目標として、産学民連携型のセミナー「Let me know! Minoh!セミナー」を開催した。</p> <p>本実践は、留学生が留学先・箕面を自分の町として認識し地域連携を深めていくという「主体の新しさ」、新キャンパス開設、新駅設置による人口増加と発展が見込まれる地域の町づくりに関わるという「場の新しさ」、未渡日の学生が世界の各地から箕面のローカルな情報にアクセスできるように、地域と在外留学生を繋ぐという「方法の新しさ」、この三点を兼備したものである。本発表ではセミナーの実践報告に加え、来日前のセミナーに参加した留学生が来日後の箕面での学びの中でどのような成果を出したのかについても紹介し、今後の課題についても述べる。</p> <p>発表 2: 関口美緒 (筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター・非常勤講師)</p> <p>作文クラスにおける段落作成の誘導ーフローチャートを用いてー</p> <p>2022 年春学期、M 大学の作文クラスで行った「仕組み・手順・方法」という課題での作文指導について報告する。学生は漢字圏の上級日本語学習者、学部 1 年生で経済・経営専攻である。作文の内容は、「入学・入国」「物品の購入・契約」の手続きや「料理手順」などである。「順序立て」、「段落立て」につながる指導として、「フローチャート」を用いた。フローチャートは、経済専攻の学生になじみ深いという特徴もある。</p> <p>作文は、600 字から 800 字とした。通常の手順の他に、例外や問題生起した場合の対処も入れるよう指導したため、より複雑な説明文になった。また、個人の経験やコメントも入れ、個性のある説明文になるよう求めた。</p> <p>「フローチャート」という手間をかけることで、より複雑な場面や例外に対する手順が明確化され、混乱なく書くことができた。本発表では、主に「仕組み・手順・方法」の作文指導での流れと学習者が作成したフローチャートを紹介する。</p>
<p>14:45~ 15:15</p>	<p>発表 3: ニノ宮崇司 (アルファラビ・カザフ国立大学、准教授)、Umarova Munojot (ウズベキスタン国立世界言語大学付属イノベーションセンター・上級研究員)、小野正樹 (筑波大学・教授)</p> <p>ウズベク人日本語学習者による禁止の注意</p> <p>本発表は日本語とウズベク語を参照しつつ、ウズベク人日本語学習者(UJap)による禁止の注意の調査結果を示す。DCT のデータをもとに分析を行った。DCT には現実的な発話を得にくいという問題があるが、社会的変数を調整しやすいという利点がある。本発表は社会的変数の影響に焦点を当て、調査を行った。結果は次の通りである。</p> <p>類似点: (1) ウズベク人日本語、ウズベク語、日本語ともに、見知らぬ人に対して禁止の注意を行わなかった。(2) いずれの言語においても Direct type の注意より Representative-Direct type の注意の使用頻度が高かった。</p>

	<p>相違点:(1) UJap は、日本語母語話者よりも、謝罪を付加する傾向にあった。これは自然発話の観察ではなく、DCT に着目したからこそ得られた結果である。(2) Representative-Direct type の述語形式において、日本語母語話者は「～は禁止です」という表現を多用したが、UJap は「～は禁止です」だけでなく「～はだめ」も多用した。(3)日本語は間接的であったが、ウズベク人日本語はより直接的であった。</p>
	<p>発表 4: 黒田史彦(東京都立大学・准教授)、伊作太一(株式会社コークッキング・取締役)、木下直子(早稲田大学・准教授)、田中久実(Language Plus One・代表)、伴野崇生(社会構想大学院大学・准教授)、鍋島有希(桜美林大学・特任講師)</p> <p>外国人材との協働コミュニティをつくるためのパターン・ランゲージの全体像とその作成過程</p> <p>外国人材を受け入れ、共生できる職場＝協働コミュニティを作り出すためのコツをまとめ、「外国人材との協働コミュニティを創出するためのパターン・ランゲージ」(協働パターン)を作成した。</p> <p>まず、職場内共生に積極的な企業にインタビュー調査を実施し、成功のための定石的な実践知・経験則を抽出して 31 のパターンに整理した。各パターンを言語(ランゲージ)化した結果、「未来をつくる仲間」「ルールのコラボ」といった 31 の〈ことば〉が得られた。〈ことば〉は 10 のグループに編成され、協働パターンを体系づけている。</p> <p>これから協働コミュニティを実現・推進しようとする職場では、社員が自らの取り組みを振り返る「観点」として、社員同士で互いの取り組みを語り合う「共通言語」として、さらには、新しい取り組みを生み出す「発想の種」として、〈ことば〉を活用することができる。</p> <p>発表では、協働パターンの作成手順を記述し、その全容を紹介する。</p>
<p>15:15~ 15:45</p>	<p>発表 5: 小野正樹(筑波大学・教授)、Antoine Abi Aad(Zayed University・助教)</p> <p>中上級学習者向け日本語教育教材「日本語マグネット」のビジュアルデザインの必要性と有効性</p> <p>日本語中級後半から上級レベル対象の日本語アニメーション教材「日本語マグネット」の開発の狙いと特徴を報告する。コロナ禍の影響もあり、TedED などのアニメーション教育教材の利用は増し、教育効果を上げている。本教材は、日本語が現代の日本語社会でどのように使われているかを、日本語教科書から離れ、トピックベースで、日本語の名前、色、音、歴史、ジェンダーなどのテーマで扱い、日本語力と日本理解、母語理解と自国の理解促進のための 15 章からなるアニメーション教材である。日本語学習者に、いかに授業内容を伝えるかの工夫を、ビジュアルデザインの観点から、キャラ・色彩・テンポ・専門知識の具体化に関わる制作の工夫について報告する。</p> <p>発表 6: 松岡里奈(大阪大学日本語日本文化教育センター・講師)</p> <p>日本文化学授業の同期型遠隔配信におけるチャット欄活用の一提案 —授業者以外の教員によるくやさしい日本語>による授業解説—</p> <p>大阪大学日本語日本文化教育センターは日本文化学系統の専任教員数名によるリレー講義を、日本語・日本文化研修教育共同利用拠点事業(以下、拠点)の遠隔配信事業の一環として国外の大学に Zoom を通して同時配信してきた。(松岡・立川, 2021)発表者は拠点担当として毎授業の配信補助に入り、2021 年秋～冬学期からは Zoom のチャット欄において講義の内容を「くやさしい日本語」(庵編著, 2020)でまとめなおすなどの日本語サポート(以下、授業解説)を行っている。本発表では、受信した国外の学生に対して行ったアンケート調査の結果(延べ 71 名)から明らかになった授業解説の評価について述べる。調査の結果、68 名(95%)が「学習の役に立った」と回答し、授業者の説明の速度、語彙の難しさのため理解が追いつかない場合に理解の助けとなったようだった。この取り組みは日本語母語話者との日本語でのオンライン交流イベントなどでも応用可能であると言えるだろう。</p>
<p>15:45~ 16:00</p>	<p>休憩</p>

16:00~
16:30

発表 7: 笹川史絵(大阪大学日本語日本文化教育センター・特任助教)、下村朱有美(大阪大学日本語日本文化教育センター・特任講師)

日本語ティーチングアシスタントのオンライン実践における困難点とその要因 ～ティーチングアシスタントの語りをもとにした海外日本語教育機関における事例研究～

本研究では、海外日本語教育機関における日本語ティーチングアシスタント(以下、TA)に対しオンラインでの教育補助活動について聞き取りを行った。本 TA 活動は 2019 年まで、TA が教育機関のある国に滞在して日本語クラスの教室活動の補助を行うものであったが、2020 年以降、TA は日本からオンラインで活動を行うことになった。本発表では、TA 活動のオンラインへの移行による活動内容、及び受け入れ校との関わりの変化について述べ、オンライン TA の実践の中での「気づき」等について考察する。半構造化インタビューにて得られたデータを SCAT を用いて分析し、「気づき」の内容その要因を整理した結果、対面授業時にはアクセスが容易であった学生の参加度や既習事項、文化的背景などの情報がオンラインでは得にくいことに起因する困難点が明らかになった。これらの困難点をもとに、TA の円滑なオンライン TA 活動参与について検討する。

発表 8: 陳祥(筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター・非常勤講師)

オンライン授業における“manaba”活用の試み —相互閲覧機能と掲示板によるスタディ・ログを中心に—

本稿は、オンライン授業の「補講日本語 4 書く-1A」の受講生 6 名を調査協力者とし、学習者の学習過程を長期的な視点から明らかにするものである。授業では、クラウド型教育支援システム(manaba)の相互閲覧機能と掲示板を活用し、宿題の提出、学習者の自己評価と他者への評価等は manaba 上で行う場を設定する。そこで本研究では、メジロー(Mezirow,J)の「変容的学習の理論」に基づき、manaba に記録されたスタディ・ログのデータと授業アンケートの調査結果を分析することを通して、自他者の考えの共有や、他者への評価の活動が、学習者に新たな経験の価値や意味などを示し、それによって自分自身の考えを広げたり、深めたりするような自己変容に至るのではないかと考えられる。そのため、スタディ・ログは単にデータを記録することだけが目的ではなく、学習者の学習意欲をより高めていくこと、学びを促進することに活用できると考えられる。

16:30~
17:00

発表 9: 加藤均(大阪大学日本語日本文化教育センター・教授)、藤平愛美(大阪大学日本語日本文化教育センター・講師)

ポストコロナ時代を見据えた日本語・日本文化教育の多角化戦略

大阪大学日本語日本文化教育センターでは、①国費学部留学生予備教育プログラム(理系対象)、②国費日本語・日本文化研修留学生教育プログラム、③メイプル・プログラム(交換留学生プログラム)を三本柱とする留学生教育が進められ、その外側に教育関係共同利用拠点としての活動が位置づけられてきたが、ポストコロナ時代を見据えて、その教育・研究の多角化を進めている。①からはすでに本学インターナショナルカレッジとの連携による学内進学準備課程であるファウンデーション・プログラムが誕生し、②からは本学グローバル日本学教育研究拠点との連携による理系大学院生対象の日本学教育プログラムが生み出されつつある。また、③では地域社会との連携による PBL 活動が展開されており、その結果が企業との教育一体型研究に繋がっている。本発表では、こういった連携戦略の全体像を紹介していくことで、留学生教育機関としての一つのあり方を提示したい。

	<p>発表 10: 大竹春菜(筑波大学大学院・大学院生)</p> <p>タイ人高校生の日本語学習意欲に影響を与える要因—テキストマイニングによる自由記述の予備的分析—</p> <p>海外日本語教育において、最も大きな層を占めているのは中等教育機関に所属する学習者である。その多くは必修／選択の第 2 外国語科目として日本語を履修しており、非自己決定的に学習を始める場合も少なくない。よって、日本語学習に対する動機づけが希薄な傾向があると指摘されている。では、そのような学習者は何によって学習意欲を高めたり失ったりしているのだろうか。学習意欲に影響を及ぼす要因を探るため、タイ人高校生を対象として選択式項目と自由記述項目からなる質問紙調査を行った。そのうち本発表では自由記述回答に焦点を当て、代表的な話題や従来扱われてこなかった要因について報告する。KH Coder(樋口 2020)を用いた計量テキスト分析の結果、「日本・日本文化への興味」や「難易度・自信」等に関する記述が頻出しており、「コロナ禍の影響」についての記述も多く見られた。また、日本語科目以外の事情も学習意欲に影響を与えることが示唆された。</p>
<p>17:00~ 17:10</p>	<p>総括: 伊藤秀明(筑波大学・准教授、日本語・日本事情遠隔教育拠点長)</p>
<p>17:10~ 17:40</p>	<p>オンライン懇談会</p>